

私は正直に言うと、英語が得意なわけでも人に誇れるような経験を持っているわけでもない。英語は苦手だし、外国人を目の前にすると、緊張してしまう。自ら進んで、世界に飛び込んでゆくことにも立ち止まってしまったり、勇気がいる。

中学生の時、国語の授業で学ぶ古典作品は何となく難しく感じられた。登場人物の名前も背景も複雑で、当時の貴族社会の価値観も今の私たちには想像できない架空のもののように思っていた。しかし、高校に入り、選択授業で古典を受け始めて、様々な作品に触れていくうちに、その印象が自分の中で少しずつ変化し始めた。

そのきっかけとなったのが菅原孝標女だ。彼女は「最古のオタク」と言われるほど熱狂的な源氏物語のファンである。その熱狂ぶりは、彼女自身が晩年に書いた「更級日記」という作品からもよく伝わってくる。作品内の「門出」という段落では、東国の田舎に生まれた作者が姉や義母から聞いた「源氏物語」などの物語を読むために、都に行きたいと手作りの仏像に一生懸命お祈りする様子が描かれている。この時の菅原孝標女の「京都に行って物語を読みたい」という懸命な祈り。それは、萩市でも中心部ではなく、イノシシやサル、クマが毎年出没し、防災無線で注意を呼びかけるような昔村だった山奥の田舎に住んでいる私が時々考える「推しのライブを見たいから大阪に行きたい」、「コミックマーケットで本やグッズを買うために東京に行きたい」という願いと根本的には変わらないものがあるように感じた。また、そこから好きなものや興味のあるものを見たい、欲しいと思う気持ちは、生きる時代が違って変わらないものなのだと妙に納得したのだった。

成長して京都に住み始めた少女時代の菅原孝標女が描かれる「源氏の五十余巻」というシーンでは、親戚のおばさんから貰った「源氏物語」などの作品に昼夜熱中する様子や当時の菅原孝標女が「年頃になれば源氏物語に登場する女性のように美しくなるはずだ」と考えていたことが語られている。この章の最後に菅原孝標女は、物語を読むことばかりに熱中して、自分の身だしなみや教養を高める努力をおろそかにしていた当時の自分に対して「今思うとあさはかで呆れ果てたものだ」と冷静に評価している。「黒歴史」という言葉がある。現代のオタクの中では古典作品とも言えるアニメ「ガンダム」シリーズの中から派生した、身悶えするような恥ずかしい記憶を示す言葉である。彼女の生きた時代にそのような言葉はおそらくなかったが、同世代は関心を持ち、意識していたであろう身だしなみや教養を身につけずに、物語に没頭し過ぎた当時の自分を晩年になって後悔しているし、年頃になれば物語の登場人物のように自分もなれると信じていた幼い自分に対する恥ずかしさはまさにガンダムでいう「黒歴史」と言えるだろう。

古典作品は、遠い過去のもので今と社会制度も恋愛観も何もかもが違う。しかし、その中で描かれる人々の感情や考え方は意外にも今の私たちとほとんど変わらない。菅原孝標女のように、何百年も前の作品でも、現代の私たちが共感できる部分がたくさんある。世界を広げていくことは勇気を持って立ち上がり、行動に移すことだけではない。古典作品を通して、自分の世界が広がるように、知識を自分の中に取り入れ、自分の中にある世界と融合しぼわんと広がってゆく世界もある。また時代を越えて、点と点でつながり、構築されていく世界もある。菅原孝標女と実際に会って、話をする機会は今後訪れなくても、「その気持ち、分かるよ」「私もいつか京都に住みたい」と思いながら、私は今日も村の防災無線に耳を傾けている。